

# しょうが有機栽培の安定生産技術と経営収支

山形県農業総合研究センター食の安全環境部

## 研究のねらい

有機農業の取組の期待が高まる中、地域内の流通で注目されている有機野菜のうち、近年、直売所等で「掘りたての新鮮なしょうが」（新しょうが）の人気の高まっている。そこで、しょうがの有機栽培による安定生産技術を開発し、県内生産者と連携しながら現地実証等によりしょうが有機栽培の経営収支を試算した。

## 研究の成果

- ① しょうが有機栽培ではアワノメイガによる被害が収量に大きく影響するが、定植から8月中旬までトンネル全面遮光栽培を導入することで（写真1）、生育が安定するとともにアワノメイガの被害が減少し（表1）、普通遮光栽培よりも商品収量が増加する（図1）。
- ② 「新しょうが」を9月下旬から10月下旬まで販売する場合、出荷期に生育旺盛な大株を選びどり収穫することで（写真2）、高品質な「新しょうが」の安定生産が可能である（図2）。
- ③ 本技術を導入した有機栽培「新しょうが」の収量は10a当たり2t程度で、地域内の直売所など販路を確保することで高収益が期待できる（表2）。



写真1 トンネル全面遮光栽培

注. 栽植様式は畝幅150cm 株間40cm 2条植え



写真2 選りどり収穫した「新しょうが」

表1 収穫時のアワノメイガによる被害の割合

遮光管理区	地上部の茎葉	地下部しょうが
トンネル全面遮光栽培	5.8%	1.9%
普通遮光栽培*	10.3	6.4

※屋根面だけ遮光幕を覆う栽培

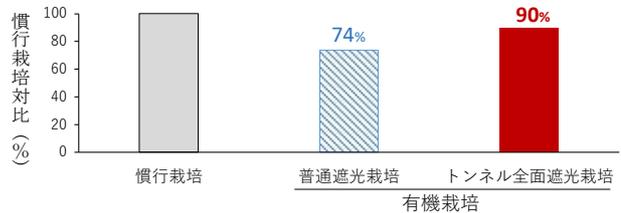


図1 有機栽培の商品収量（慣行栽培対比）

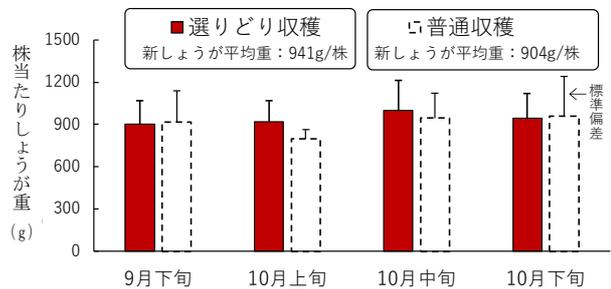


図2 9月下旬～10月下旬の選りどり収穫の収量

表2 しょうが有機栽培の経営収支（10a当たり）

流通販売事例	収入			費用				費用計:B (千円)	純利益 A-B (千円)	所得額 A-B+C (千円)
	数量 (kg):a	単価 (円):b	売上高 :A a×b (千円)	物財費 (千円)	支払地代 (千円)	販売費 (千円)	労務費 :C (千円)			
地域産地直売事例	2,000	1,000	2,000	530	15	315	609*	1,469	531	1,140
市場経由販売事例	2,000	650	1,300	530	15	203	609*	1,357	-57	552

※雇用はなく自家労働費のみ

注. 収支試算の数値は、県内しょうが有機栽培現地実証経営事例（R2～3年）をもとにセンター研究実績、山形市公設卸売市場年報、勤労統計調査を算出したもの